

# 『食』を通じた地域の見守り機能強化事業 東京研修会

「沖縄における食・見守り支援を通じて  
見えてきたこと、大切にしたいこと」

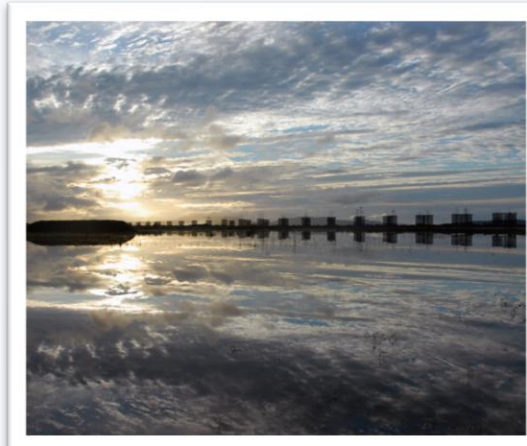
那覇市社会福祉協議会 浦崎直己

# ●自己紹介

氏名 浦崎 直己 (うらさき なおき)  
公共政策修士・社会福祉士  
准認定ファンドレイザー  
全国福祉教育推進員

## 職歴

前職 沖縄県内の新聞社で記者職を9年  
2019年～ 那覇市社会福祉協議会に入職  
子どもの居場所支援・企業連携・ボランティア事業  
広報、休眠預金事業 (実行団体、資金分配団体PO)



**本部PR ヤギも加勢**  
那覇でピージャーオーラサイ  
本部町郷友会の若手メンバーでつくる、もとぶ610会(玉城浩二会長は10日、那覇市久茂地のパレットもじ前広場で観光PRイベントを開いた。潮底島の闘ヤギ「ピージャーオーラサイ」を那覇市内で初めて開催。激しく角を突き合わせる迫力ある闘いに、観客から歓声と拍手が湧いていた。特産品アセロラのスムージーやそばの無料配布などで本部町の魅力をアピールした。610会は本部の方言名「むどろぶ」の語呂に合わせ、6月10日を「本部の日」としてイベントを企画、今回が3回目。



# 今日の内容

## キーワード

### 「なぜ食見守り支援に取り組むのか」

- ・ 背景：食見守り支援の広がりとは多様化
- ・ 前提：市民活動を否定しない 公的な仕組みや人材の不足
- ・ 食見守り支援の対象と活動分類
- ・ 食見守り支援の課題
  - 目線合わせ・ものさし の不在 顔が見える関係づくり
  - 支援の課題の変化 生活支援型
  - 見守りの体制づくり 支える仕組みづくり

# ●なぜ食見守り支援が必要なのか【背景】

背景①コロナ禍・物価高騰 ⇒ 経済的に厳しい世帯（ニーズ）の増加

- ・ 困窮世帯の顕在化
- ・ 低所得層の増大、格差拡大（二極化）
  - ⇒ 孤立・孤独も課題に
  - ⇒ 経済支援（給付）や、食支援の暫定的に後押し



## 背景②食支援活動の多様化

- ・ こども食堂など（の運営者）が課題を抱える世帯とつながった
  - ⇒ 食支援の公的サービスはないため、  
必要に迫られ、市民活動団体などが食支援を強化（支援拡充）
  - ⇒ フードパントリーや宅食支援、コミュニティフリッジの広がり  
カロリーの提供ではなく、尊厳のある食支援へ

# ●なぜ食見守り支援が必要なのか【前提】

## 前提①市民活動による食見守り支援を否定しない

- ・市民活動による社会課題（ニーズ）に対する主体的な活動（挑戦）であり、行政等が活動を制限する権利はない
- ・一方で、個別支援に必要なスキルや責任も理解する必要がある

## 前提②公的な仕組みやマンパワーの不足

- ・そもそも食材提供などの公的な仕組みはない。議論が追い付いていない
- ・行政（専門職）だけで全ての要支援世帯を発見・支援することは不可能
- ・行政の個別支援を補完する食材をフードバンクなどから確保することも
- ・専門機関がこども食堂などへ見守りや支援を依頼する事例も増加

➔地域による見守りは、異動や縦割りもなく長期的な見守りとなる。

食見守り支援に協働で取り組むためのルールや、支援が続くような仕組み（制度化・予算付け）づくりが求められている

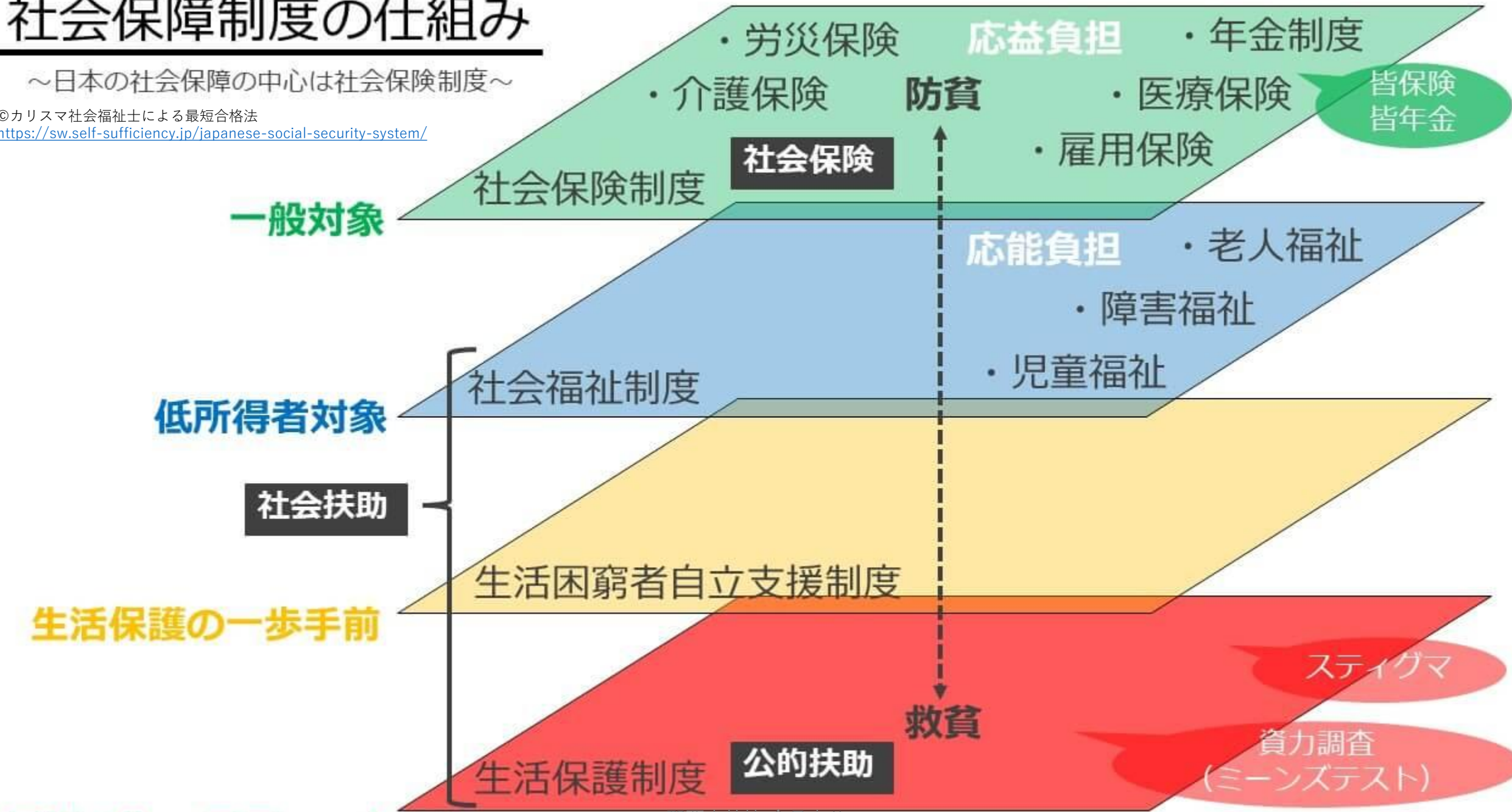


# 社会保障制度の仕組み

～日本の社会保障の中心は社会保険制度～

©カリスマ社会福祉士による最短合格法

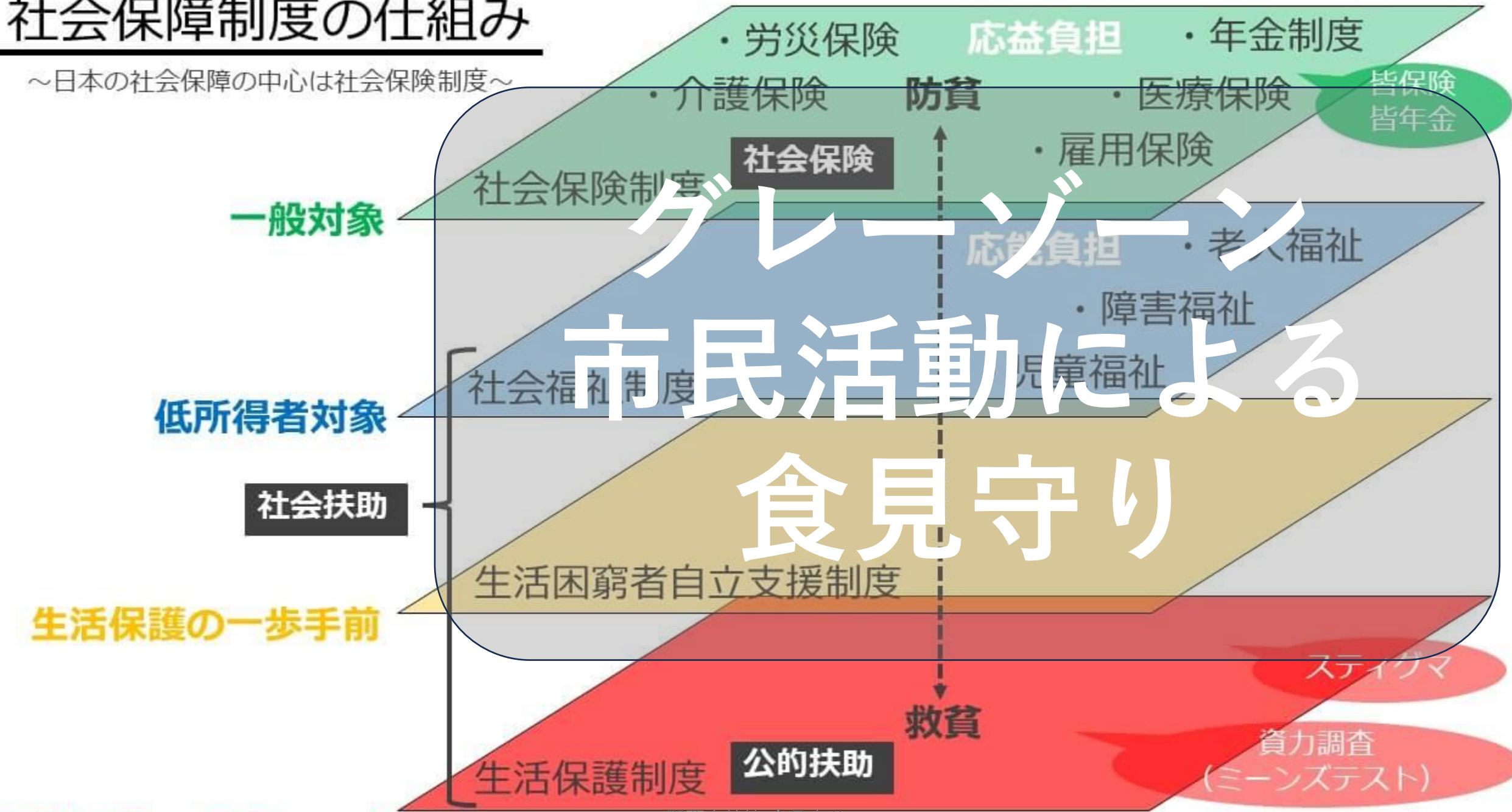
<https://sw.self-sufficiency.jp/japanese-social-security-system/>



最後のセーフティーネット

# 社会保障制度の仕組み

～日本の社会保障の中心は社会保険制度～

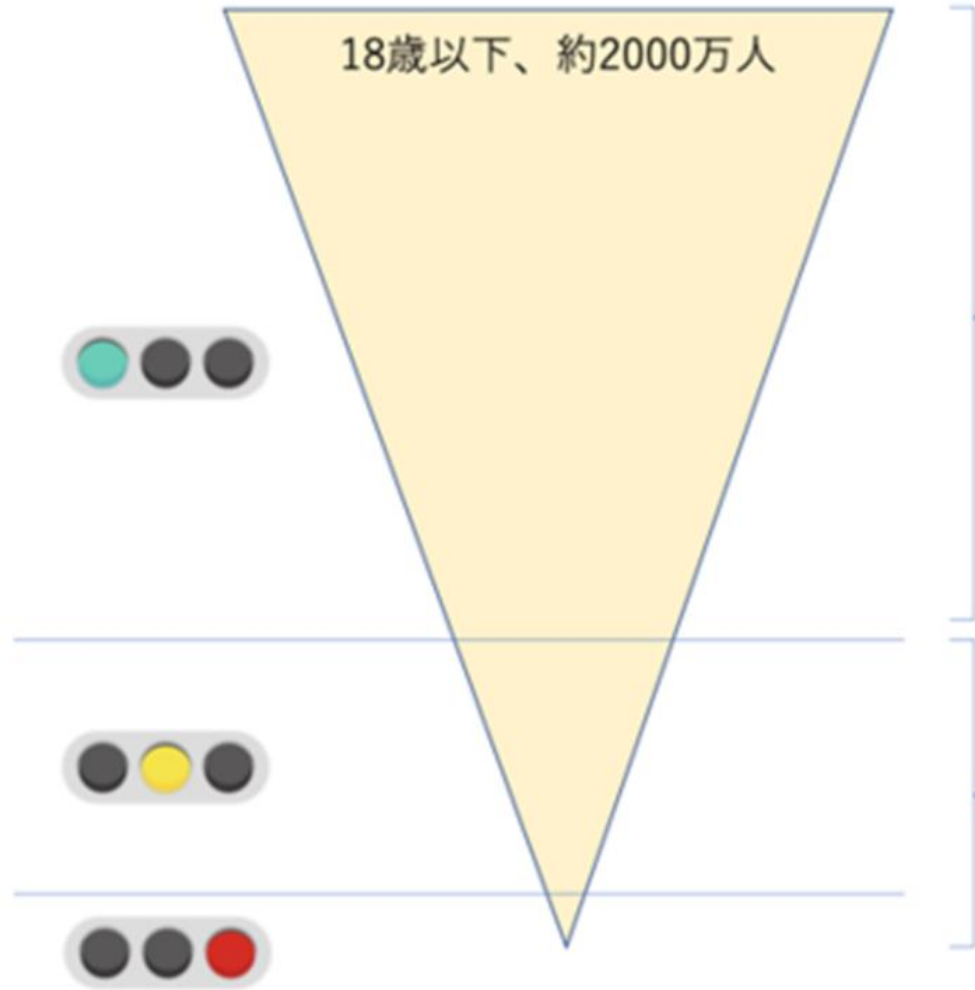


グレースゾーン  
市民活動による  
食見守り

最後のセーフティーネット

# ●こども食堂・子どもの居場所のターゲット

すべての子どもに居場所が必要 貧困であっても、なくても



基本的に問題ない青信号のはずだが…

- ・少子高齢化、人口減少
- ・リスク意識の増大

等を背景に、

- ・多世代交流
- ・異年齢集団での遊び
- ・遊び場全体の減少

によって、健全育成に課題。「生きづらさ」の蔓延

→**居場所【による交流】の必要性**

子どもの貧困13.5%、270万人

大多数は黄信号

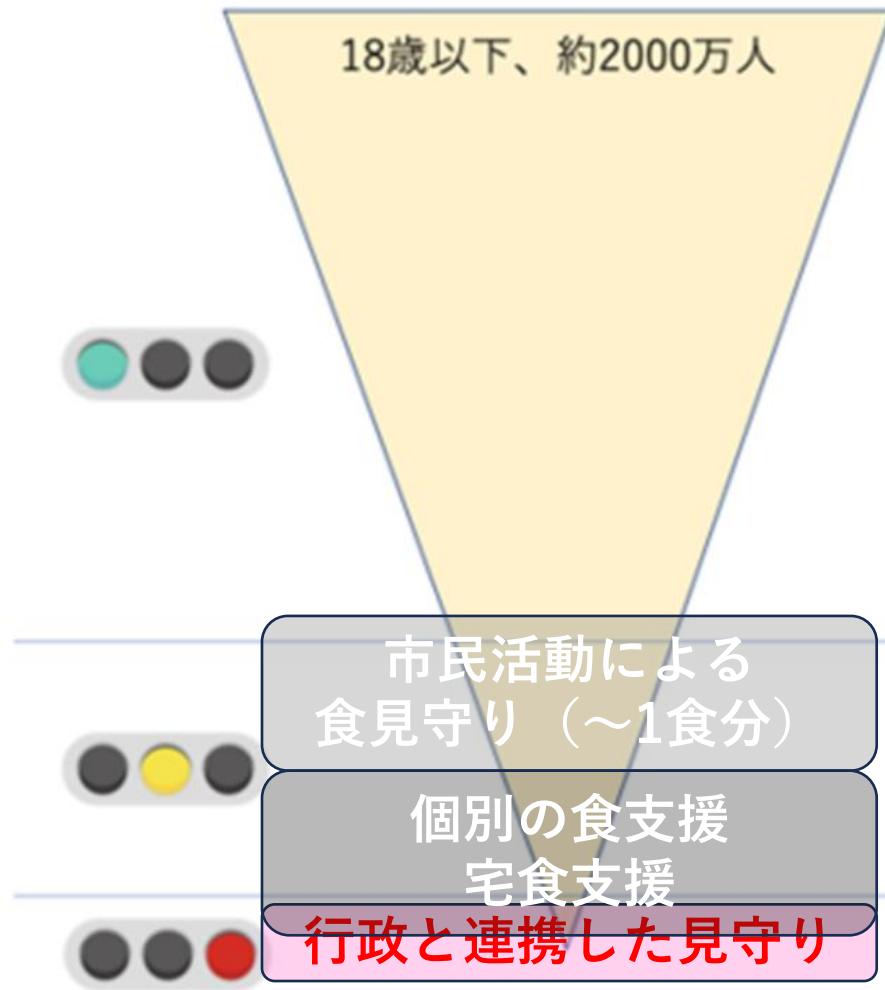
- ・服着てる、学校行ってる、飢えてない
- ・修学旅行行けない、進学等に不安
- ・相談窓口には行かない
- ・放置すると赤信号に転落する危険

→**居場所【による予防】の必要性**



# ● (個別の) 食見守り活動のターゲット (子どもの場合)

すべての子どもに居場所が必要 貧困であっても、なくても



基本的に問題ない青信号のはずだが…

- ・少子高齢化、人口減少
- ・リスク意識の増大

等を背景に、

- ・多世代交流
- ・異年齢集団での遊び
- ・遊び場全体の減少

によって、健全育成に課題。「生きづらさ」の蔓延

→ **居場所【による交流】の必要性**

子どもの貧困13.5%、270万人  
大多数は黄信号

- ・服着てる、学校行ってる、飢えてない
- ・修学旅行行けない、進学等に不安
- ・相談窓口には行かない
- ・放置すると赤信号に転落する危険

→ **居場所【による予防】の必要性**

10

# ●食見守り支援の分類 ≠生活を（継続して）支える

		対象	機能・目的	提供頻度	支援期間	提供量	専門性	課題感	予算（物資量） 規模感
①	アウトリーチ型 食糧支援	潜在的な要支援世帯	掘り起こし →支援や制度につなぐ	数回	単発	3日分		不明	非課税世帯や ひとり親世帯 から推計  対象者 × 提供量 × 頻度
②	緊急食糧支援	(潜在的orつながっている) 生活困窮世帯	命をつなぐ支援 制度利用までのつなぎ	1回	短期	3～10日分		不明	
③	宅食支援（定期）	要支援世帯	食支援・見守り	1～3か月ごと	数か月～数年	10日分			
④	見守り型 フードパントリー	要支援世帯	食支援 (物価高騰対策)	1～6か月ごと	数か月～数年	10日分			
⑤	子育て応援 フードパントリー	ひとり親世帯／子育て世帯	子育て支援	1～6か月ごと 不定期	-	3～10日分			
⑥	会食	子ども・誰でも	交流 ゆるやかな見守り	毎日～月1回	-	利用人数分		利用者数 × 活動回数	

# ●食・見守り活動のイメージ

【拠点】

●クローズ（ケア）型  
子どもの居場所

●無料塾

児童館型子どもの居場所●

こども食堂●

地域食堂●

イベント型フードパントリー●

●コミュニティフリッジ  
(公共冷蔵庫)

【コアターゲット】

【コミュニティ】

●アウトリーチ型訪問食料支（単発）

●宅食支援

【アウトリーチ】

那覇市社協 食見守り

# 食見守り支援における ポイントと課題（検討事項）



# ●市民活動団体が見守りで大切にしていること

「子どもや世帯に寄り添い、自団体でできる支援に取り組む」

- ① 子どもや世帯の味方（とことん話を聞き、思いに寄り添う）
- ② 顔が見える関係づくり
- ③ 自団体の役割、できる支援を明確にする
- ④ できない支援はしっかりと関係機関や他団体につなぐ
- ⑤ 行政や関係機関の担当者に直接つなぐことを特に意識

# ●市民活動団体における課題

- 孤軍奮闘している団体（代表）が存在する（スーパーバイズを受ける仕組みがない／モヤモヤを吐き出す機会がない／つなぎ先がない）
- 居場所が気になる段階（黄色信号・予防的な対応が必要な世帯）と、行政・支援員が対応する段階（赤信号・緊急対応）に違いがあることにより、ボランティアが担う部分や世帯がとてども増えてきている
- 先輩居場所は自力で乗り越えられたが、個別支援をするすべての居場所が自力で乗り越えられるとは限らない（乗り越える労力も膨大）

# ●ターゲットと支援（予算）規模 どの対象までか

- 生活困窮世帯～非課税世帯～（ひとり親）～孤立防止
- 公的サービスと民間支援の役割分担
- 食材確保の仕組み（供給システム）の構築
  - フードロス、寄付寄贈による確保、助成金活用（公費投入）
  - （中間支援団体の）保管庫や活動団体への配送網の整備
- 行政として、民間支援への補助やサポートの検討
  - （中間支援の）仕組みの構築・維持
  - 食材購入費

# ●見守り支援と自立支援とは

- 行政・専門機関における見守り
  - 1～3か月に1度
  - 自立支援の取り組みの中でのモニタリング
  - （制度利用に向けた）関係づくりの定期訪問
- 市民活動における見守り
  - 週1回～2か月に1度
  - 会食やフードパントリーを通じた声かけ（変化の発見）
  - 困ったときに相談できる、SOSを出せる関係づくり
- 市民活動ができる個別支援とは（自団体で抱えすぎない）
  - 関係機関と連携した見守り、つながり≠単独での支援



# ●公共性のある食支援（インフラ化）とは

- 身内向けの取り組みではなく、公共的な取り組み  
⇒ 対象者は誰もが利用可能である
- 支援・情報へのアクセスが保障されている
  - 利用条件や対象の明示
  - 該当する対象者は利用できる
- 必要な時に使える仕組みになっている
- 利用者の権利が守られている仕組みになっている

# ●事例

- 会食に来ていた子が、限界を超えてご飯を食べたり、余ったご飯を「持ち帰りたい」と言うが、家のことは話さない。
- 長年利用し、高校を中退した子から「毎日、食べるものがない」と相談が来た。
- 利用保護者が「食支援だけあれば大丈夫」といい、詳しい状況は聞けないまま、1年が経過した。
- 生活保護を申請した方がよいと感じる世帯だが、保護者が「生活保護は嫌。行政の世話にはならない」と話している。
- ひとり親の多子世帯。親は頑張っていて、定職にも就いている。何かと大変だと思うから継続して支援したい

ご清聴、ありがとうございました。  
質問があれば、何でも気軽にどうぞ♪



赤い羽根共同募金シンボルキャラクター

2025/愛ちゃん と 希望くん

●問い合わせ先

那覇市社会福祉協議会 企画総務課

担当：食見守り支援・企業連携・広報

浦崎 直己（社会福祉士）

携帯 08027954031

〒901-0155

沖縄県那覇市金城3-5-4

電話 098(857)7766

FAX 098(857)6052

メール [93879387@nahasyakyo.org](mailto:93879387@nahasyakyo.org)